西トップ遺跡の調査

―第17次発掘調査・2023年度建造物調査―

1　はじめに

カンボジア・西トップ遺跡では、中央祠堂の再構築に引き続き、東テラス（仏教テラス）の修復工事が進んでいる[1)]。東テラスに関しては、これまで数回の発掘調査をおこない、テラス内部に砂岩やラテライトによる石列や石敷遺構などの下層遺構の存在を確認している。また2022年度におこなった第16次調査では、東テラス北面の外装の構築状況と、テラス内部の下層遺構の状況を確認した[2)]。2023 年度の調査（第17次調査）では、第２～４次調査で確認している東テラス内部の東西方向の石列について、第２次調査での検出部分からさらに東へ延伸するかどうかを確認するため、発掘調査をおこなった。

西トップ遺跡は、13世紀から14世紀にかけてアンコール・トム周辺地域でヒンドゥー教寺院が上座部仏教寺院に転用されていく初期の事例の一つであり、その前身構造をあきらかにすることは上座部仏教への転換期の様相を解明する上で重要である[3)・4)]。

また、2023年度に引き続きアンコール・トム内のプリア・ピトゥX遺跡のテラス遺構について、西トップ遺跡との類似点などをあきらかとするための建造物調査をおこなった。

2　東テラスの発掘調査

2023年８月におこなった第17次調査では、前述の第２～４次調査で確認した東テラス内部の東西方向の石列について、その東端がどこまで延伸するかを確認し、東テラスの変遷をあきらかにすることを目的とした。

調査区は、東テラス東端南側の階段張出部の西側に接し、テラス南面基壇外装に沿って南北2.3m、東西2.8mで設置した（図７・８）。発掘調査の結果、当該の石列の東延長部分を確認し、ラテライトが４石分東へ続き、さらに現在の東テラス東端にある階段部の下に潜り込み、東西軸からやや北側に逸れながらさらに続いていることが判明した（図９・10）。調査区内で石列が南北へ屈曲するなどの展開は確認できなかったため、南北2.3mのト

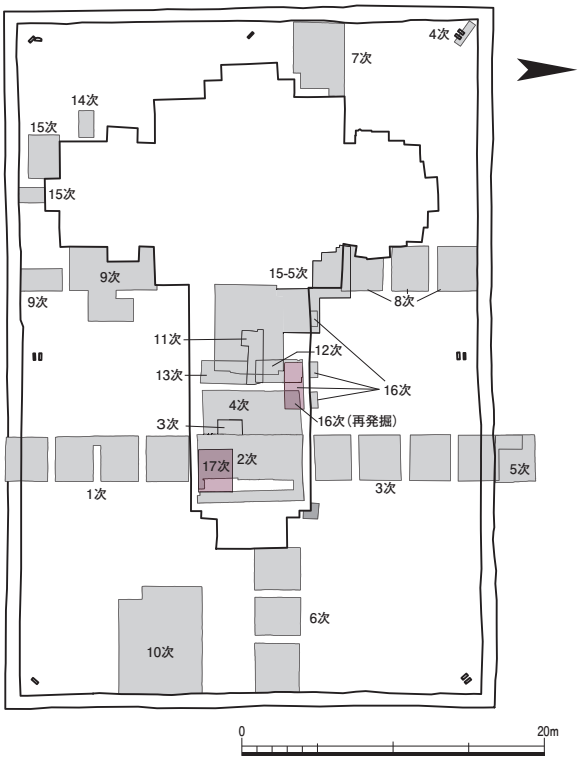


図７　西トップ遺跡発掘調査位置図　1：500

図８　西トップ遺跡第17次調査風景（東から）

図９　第17次調査区　完掘状況（東から）

レンチのうち石列両側の南北幅1.3mのみ現地表面より0.8mまで掘り下げ、石列のレベルを確認した。

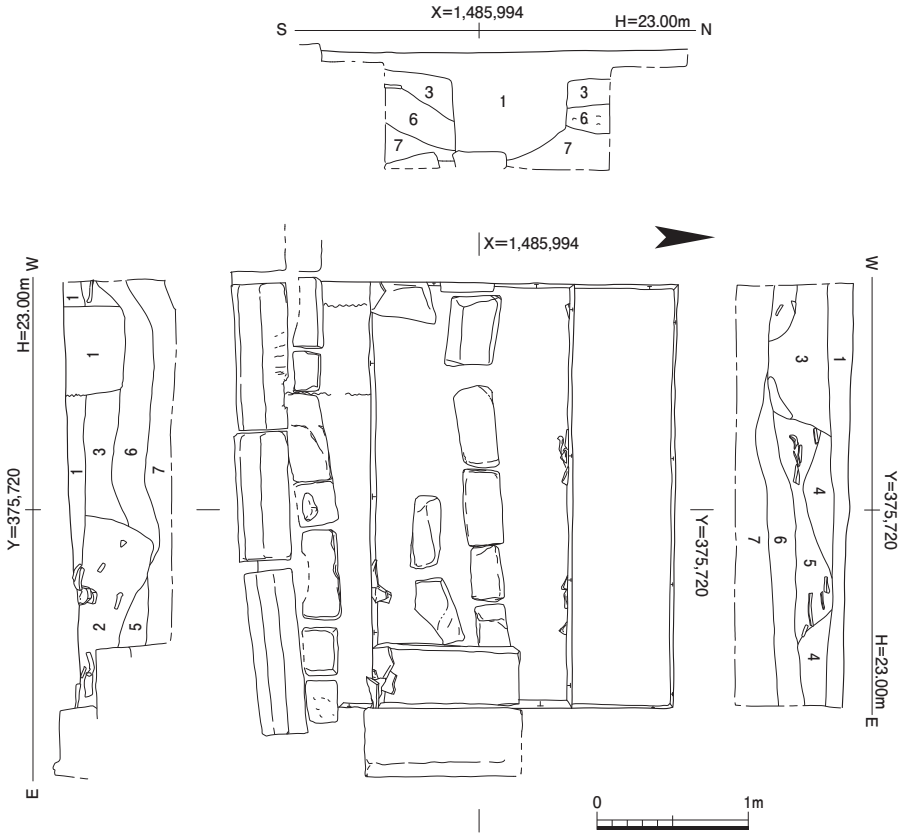
東テラス下層遺構　東テラス下層遺構は、東西に続くラテライト石列であり、今回の発掘調査の結果、後述する階段状遺構の下に潜り込みさらに続いていたことが確認できた。現在東テラス東面南側の階段部より東側の地表は今回検出した石列東端の上面より低くなっており、この石列が現在の東テラスが築造された時期以前にさらに東側へ続いていたかを検討することは困難であるが、現在のテラス東面を越えて伸びていたと推定できることから、東テラス構築以前に設けられていた中央祠堂東面から東西に延びる参道の痕跡だと推定される。さらに、第２次調査時に検出されたラテライト石列の南側にもう一列ラテライト石列を検出した。このラテライト石列は東西方向にやや乱れつつおおむね並び、上面のレベルは北側のラテライト石列よりやや下がっている。上面はきれいに揃っておらず、原位置ではないと考えられる。下層遺構の途絶にともなって石材が散逸しているようである。

トレンチ東端ではテラス東面の４段の階段とは反対側（西側）へ砂岩２段による階段状遺構を検出した。二つの砂岩材はともに幅約0.45m、長さ約1.0m、高さ約0.3mを測る。下段の砂岩材にはモールディングがみられ、転用材と考えられる[5)]。東テラス基壇外装の裏込め石として積まれている。東テラス下層のラテライト石列より上層の整地層はこの下段石材とラテライト石列の間にも見られ、現存する東テラスの東端部造成時に大量の瓦・ラテライトチップを含む整地をしていると考えられる。

東テラス下層ラテライト石列の両側のトレンチ北・南壁において、ラテライト石列を覆うようにラテライトチップの多く含まれる約20㎝幅の整地層、その上に瓦を大量に含む約20-30㎝幅の整地層が確認された。トレンチ西壁（第２次調査で確認した下層ラテライト列周辺）では、この下層ラテライト石列に向かって、両側からこの２層の整地層が落ち窪んでいる様子が確認できた。

東テラス整地層にともなう出土遺物　前述の整地層に含まれる遺物は主に瓦であり、今回検出した下層ラテライト石列より上部に堆積している。この整地層下部には瓦

調査区東壁下層ラテライト石列と砂岩の関係



１：第２次調査埋土
２：瓦片（黒褐色釉主体）を多量に含む
３：ラテライト片少量含
４：砂質土（炭化物なし）
５：瓦片（黒褐色・褐色）を多量に含む
　瓦直下に炭化物を多く含む
６：ラテライト片を多量に含む
７：ラテライト片少量含・砂質

図10　西トップ第17次調査区・第16次再発掘区　平面図・土層図　１：50

溜まりに炭化物が比較的密にともなう地点があり、祭祀など何らかの人間活動にともなう痕跡が想定できる。

層位別に取り上げた遺物には各層１～２点程度の白磁あるいは青磁片が確認でき、これらの出土遺物については今後の総括報告書でこれまでの出土土器・磁器とともに報告する予定である。

第16次トレンチの再発掘　2023年２月に実施した第16次調査の南壁断面について、調査後に過去調査の図面と照らし合わせて再確認をおこなったところ、土層を再確認する必要があったため、第17次発掘調査に合わせ第16次発掘調査の東テラス上のトレンチ（A・B）を再発掘した（図７）。その結果、当該トレンチの第４次および第12次との重複部分を確定した上で、前回出土した瓦・陶磁器等の層位を確定することができた。　**（西原和代）**

３　プリア・ピトゥXの調査

昨年度に引き続き、アンコール・トム北東部にあるプリア・ピトゥ遺跡のうち、唯一の仏教遺跡である東部のX遺跡（図11）について建築調査をおこなった。X遺跡は正確な年代は不明であるが14～15世紀頃の成立と伝え、巨大な方形の基壇に建つ祠堂と、その東に展開するテラス遺構によって構成される。2023年度は、東のテラス遺構について、平面・構造・装飾などの比較研究のため、平面形状の実測と、基壇モールディングの形状の記録をおこなった。

テラス遺構の構成　テラスは東西約47m、南北約9.4mの東西に長い矩形で、東面中央に階段を設ける。テラス上には、西部に仏像を安置する台座を構える。台座は、東西約2.9m、南北約2.8mである。台座の手前には、砂岩の敷石が南北3.5m、東西8.1mの範囲に設けられており、これは儀式等の際に僧が着座するための場所で、アンコール地域の他の仏教寺院で現在も見られる施設である。テラスの平面は、西から約14mの位置で幅をやや狭めている。また、東端から約11mの場所でも幅を狭めており、この位置ではテラス上面も東端の階段に向かって一段下がり、砂岩石列が並ぶ。ここから階段に向かってはさらにもう一段石列を並べて上面のレベルを下げ、東端中央の階段へと続く。前述の敷石の東端から東側の段差までの範囲はほぼ平坦面である。かつては仏像台座、敷石、中央の平坦面の上部には屋根が架けられていたと考えられるが、現在はその痕跡は見られない。

基壇外装は、葛石と東端の階段部を砂岩製とする以外はラテライト製である。高さは、西端が最も高く約1.2mを測り、前述の通り東端の階段部に向かって徐々に上面のレベルが下がり、階段部分は約0.9mを測る。基壇外装は、葛石以外の羽目石・地覆石がラテライト製で、羽目石にはモールディングが施されている。羽目石は基本的に５石で構成されており、曲線と直線を組み合わせた幾何学的な形状でクメール建築の常套である上下シンメトリーに造る（図12）。最上段の葛石は砂岩で、ラテライトに比べてやや大きい。なお、階段部の周辺には砂岩製のナーガ像が散乱しており、かつては階段の袖石上部にこれらが設置されていたと考えられる。

西トップ遺跡との比較　まず、テラス遺跡として、西トップ遺跡東テラスとの相違点を整理したい。プリアピトゥXのテラスは、特に東西方向が非常に長く、上面には仏僧の座の敷石が残る。西トップ遺跡では、テラス上部に設置されたとみられる建物の痕跡は確認されているが、僧座とみられる敷石などは設けられていない。また、東面の階段についても、プリアピトゥXでは中央一か所に設けられているが、西トップ遺跡では東面の両端に設けられており、設置位置が異なっている。階段の位置は、テラスの平面規模や、儀式の際の僧や人々の導線に関わるとみられ、他のテラス遺跡の使われ方などを参考に、これらの違いを検討する必要があろう。

次に、石材に施されたモールディングの形状についてである。西トップ遺跡では、中央祠堂内部の前身基壇がラテライト製で、モールディングが施されている。今回確認したプリア・ピトゥXのテラスの石材は、大きさ、モールディングの形状、構成が西トップ遺跡の前身ラテライト基壇の石材に非常に似通っていた。仏教テラスは、当地域に上座部仏教が広まった14世紀以後の建築で、プリア・ピトゥXのテラスは15世紀頃と伝える。このモールディングと西トップ遺跡の前身ラテライト基壇が似ているというのみで西トップ遺跡の基壇の年代を決定することにはならないが、建築年代の特定において、非常に貴重な類例と位置づけられる。

なお、西トップ遺跡の東テラスの基壇外装は、アンコール・トム内のヴィヒア・プランプル・ロヴェン遺跡（15世紀）の基壇外装と似通っていることが指摘されてお

図11　プリア・ピトゥX　テラス遺構上面（東から）

図12　プリア・ピトゥX　テラス遺構基壇外装モールディング

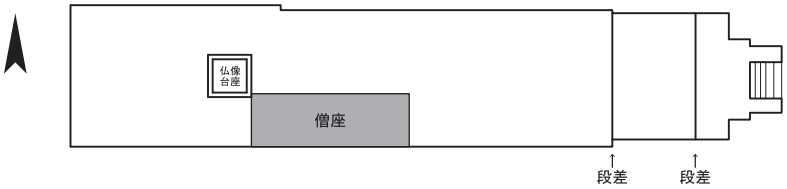


図13　プリア・ピトゥX　テラス遺構模式図

り[6]、今回の調査成果を加えて、あたらめてアンコール地区内の類例建築について整理を加えていきたい。

4　まとめ

今回西トップ遺跡東テラスの下層の石列が東に延長することを確認し、東テラスの下層遺構については全容がほぼあきらかになった。これまでの発掘調査の成果を合わせると、東テラスの下層には中央祠堂東に何らかの石造構造物とその東面に石敷遺構が位置し、それとほぼ同時期にそこから東に延びる参道が築かれていたと考えられる。参道はおそらくさらに東に緩やかに北に振れながら延びていたと考えられるが、東テラス構築時に破壊されたとみられ、その行方は不明である。今後、西トップ遺跡周辺の土地の利用状況について調査が進展することを期待したい。

一方で、今回の調査では、前回の調査時に課題となった東テラスの増築と中央祠堂砂岩基壇の構築の時期差についての疑問点を解明するための新たな手掛かりはなく、東テラスの構築のタイミングについてはこれまでの調査成果よりいくつかの可能性を検討することとなる。今回の発掘調査で出土した遺物を含め、これまでの発掘調査の成果を改めて整理していきたい。

また、建造物調査では、プリア・ピトゥXの調査より14世紀以降にラテライトに繰形を施した事例があることを確認し、西トップ遺跡の前身ラテライト基壇の年代特定の手がかりを得ることができた。今後は、考古学調査・建築学調査の成果を照らし合わせ、西トップ遺跡の変遷についてあきらかにしたい。

本稿には、JSPS科研費JP19K04830「ポスト・バイヨン期のクメール建築の建築的特徴に関する研究」の成果の一部を含む。

（大林　潤）

註

1）西原和代・佐藤由似・笠原朋与・Lam Sopheak「西トップ遺跡の修復－中央祠堂屋蓋部の再構築－」本書８－９頁。

2）山崎有生・大林潤「西トップ遺跡の建築調査－2022年度の成果－」『紀要 2023』、杉山洋・西原和代・庄田慎矢「西トップ遺跡の発掘調査－第16次調査」同上。

3）下田麻里子「13世紀末から16世紀アンコール・トムの上座部仏教寺院建造時期に関する検討」『東南アジア考古学』41、5-23頁。2022。

4）Sato Yuni. New Evidence at Western Prasat Top, Angkor Thom. Early Theravadin Cambodia: Perspective from Art and Archaeology. 203-230頁. NUS Press with the Southeast Asian Art Academic Programme. 2022.

5）材の大きさからバイヨン寺院からの転用材の可能性があるとのこと、JASA石塚充雄・成井至両氏のご教示による。

6）奈文研『西トップ遺跡調査報告』学報 88、2011。